パトリシア・インガム著

ギャスケルの方言使用とディケンズへの影響

松岡光治訳

第一節　ギャスケル以前の産業小説

ディケンズは、『ニコラス・ニクルビー』（一八三八～三九年）と『デイヴィッド・コパフィールド』（一八四九～五〇年）において、社会階級と直接関係がない地域の方言を使って実験を試みた。[一] そして『ハード・タイムズ』（一八五四年）では、産業社会における不平等が中心となる作品で方言を扱うことの難しさに直面している。この小説の特徴は、とりわけ十九世紀の文学作品における方言の取り扱い方、つまり、方言以外の点でも事実に基づく正確さを競って求めた産業小説家たちの多くが、どのように地方の言葉を提示しているかにある。というのは、ディケンズが方言を利用した初期の二作品と『ハード・タイムズ』との違いを際だたせている特徴は、この後者の物語の性質にあるからだ。その特徴とは、一つにはイングランドの産業地域、特に北部地方に対する当時の関心から生まれたものである。このような関心は、ディケンズが『ハード・タイムズ』を書く前から、すでに他の作家たちの小説に現れていた。例えば、フランシス・トロロプの『工場の少年、マイケル・アームストロングの生涯と冒険』（一八四〇年）、[二] シャーロット・エリザベス・トナの『ヘレン・フリートウッド』（一八四一年）、[三] エリザベス・ストーンの『木綿王、ウィリアム・ラングショー』（一八四二年）[四] などである。

これらの小説はまた、木綿工業に見られる社会問題への関心によって、一つのグループに分類することができる。『マイケル・アームストロング』と『ヘレン・フリートウッド』は工場の醜悪な状況と労働者への搾取を特に強調している。『ウィリアム・ラングショー』の関心事はむしろ、産業労働者たちが不幸にもかか

わらず慕わざるを得ない資本家たちとその人柄の方にある。すべての小説に共通する点は、ある産業地域の生活を描き出す基本原理として事実を記録していることにあるが、その忠実さの度合いが各作家の気質によることは言うまでもない。

こうした小説の伝統とディケンズとの結び付きはギャスケル夫人の『メアリ・バートン――マンチェスター生活の物語』（一八四八年）――一八五四年までに五つの版がすでに印刷されていたことを考えると、おそらく同種の物語で人気がもっとも高かったはずの彼女の処女作――によってもたらされた。今しがた述べた小説の作家たちのように、一八三二年からマンチェスターで生活を始めたギャスケル夫人も産業地域を目の当たりにしていた。中産階級の人々の容疑を晴らしたいという少々複雑な気持ちにもかかわらず、彼女はスラム街の住宅や工場の状態について、極めて詳しい記述を行っている。ディケンズが『ハード・タイムズ』を書いているとき、彼女は『北と南』という一八五四年九月以降に彼の週刊雑誌『ハウスホールド・ワーズ』で連載されることになる別の産業小説を執筆していた。ディケンズが彼女に手紙を書いて、[五] 自分の物語にストライキを導入するつもりはないと言って安心させたとき、自分のことを同じ産業小説の分野における同業者と考えていたことは明らかである。

ギャスケル夫人が従来の小説家の誰よりも事実の正確さに関心を寄せていたことは間違いないし、ディケンズにも影響を与えたと言って差し支えない。このことは特に彼女の新たな言語処理にはっきりと現れている。それまでの産業小説はどれも叙述の迫真性を狙っていたが、残念ながら労働者階級の話し言葉を多少なりとも本当らしい形で提示することへの関心は単発的にしか見られなかった。『マイケル・アームストロング』では、ダービシャー州のディープバレーという名の牢獄のような工場で働く極貧の子供たちが、「こったどこさいだら（bide here）、たんげ鞭でただがれる」といった非標準の表現を幾つか使っている。「北国なまりで、つまり南国の連中が正しく書き取るには困難と危険を伴うような、方言まるだしで」話している近隣の農夫への言及もある。『ヘレン・フリートウッド』にも同様に、労働者たちは上流階級のような話し方をしないことが数ヶ所で仄めかされている。そこではヘレンが貧しい労働者たちの話し方について「邪悪で汚い」と評している。アイルランド移民の孤児ケイティ・マロニーには、「さぐる」（*spake* < 'speak'）や「ふるしー」（*ould* < 'old'）といった語形が幾つか、「おめ」（*yees* < 'you'）に関する異なった語形の痕跡や、「わ、アイルランド人だべ、ほがに、どったごど、さべれば、いが?」（what else would I spake and I an Irishman）といったアイルランド方言を意図した構文が一つ二つ与えられている。この教師志望の娘は、「来だ」（*comed* < 'came'）という非標準的

な文法の要素や関係代名詞として使われる「ごど」（*wot* ＜ 'what'）だけでなく、「つぼけ」（*warmint* ＜ 'vermin'）や「こっち」（*ere* ＜ 'here'）のような発音の混交においても、欠点をさらけ出している。

『ウィリアム・ラングショー』はこれら二つの小説とは著しく異なっている。この作品には方言についての意識が幾らか見られるのだ。それは、特にウィリアム・ブレイドウという世捨て人について、彼は「洗練さに欠ける方言」を話したとか、彼の「方言と話し方で卑しい社会階級に属していることが即座にはっきりした」とか、述べられているからである。工場労働者のナンスとジェムは方言的な言い回しを使い、ナンスの両親は「〜せないかん」（*mun* ＜ 'must'）、「〜せんめー」（*wunna* ＜ 'will not'）、「〜にゃ」（*wi'* ＜ 'with'）、「もってっちゃる」（*tak* ＜ 'take'）といった語形、そして「おらぶ」（*greet* ＜ 'weep'）や「おおかた」（*mayhap* ＜ 'perhaps'）のような地域方言を使っている。しかし、もっとも目立つのは資本家の一人、ボルショーにとって方言の話し言葉を示すもので、彼は「正しか」（*reeght* ＜ 'right'）、「もってっちゃる」（*tak* ＜ 'take'）、「〜ん」（*o'* ＜ 'of'）、そして再帰代名詞「おめえ自身」（*theysel'* ＜ 'thyself'）など、人目につく語形を用いている。重要な点は、ボルショーがラングショーと違って金持ちであるだけでなく、邪悪な放蕩者でもあることだ。あたかも、この小説の方言が階級の標識であると同時に、（かなり非論理的なことだが）不品行を示すものとしても使用されているかのようである。以上、一八四八年以前の産業小説で方言を巧みに用いようとした作家たちの試みの跡をたどってみた。

第二節　ギャスケルの方言使用における新「リアリズム」

ランカシャー方言を正確に再現することは、ある目的のために小説を書くギャスケル夫人にとって非常に重要であった。マンチェスターの「賑やかな通りで毎日のように自分を押しのけていく人たちの生活」を読者に見せたいという気持ちについて、彼女は『メアリ・バートン』の「序文」で次のように語っている。

> 雇い主と雇い人とはいつも共通の利益によって互いに結ばれるべきであるのに、このような両者間の不幸な状況について考えれば考えるほど、この声なき人々を時として身もだえさせている苦悩について、私は少しでも表現してやりたくなりました。

この「苦悩」を表現するために、彼女は工場労働者のジョン・バートン（もともとは小説のタイトルを彼の名前にちなんで付けるつもりだった）だけでなく、他の脇役たちをも使うことにした。彼

らを総動員して方言使用によって生まれる迫真性を狙ったわけである。こうした願いは、彼女が一八四八年十二月五日に印刷上の「誤植」について語ったエドワード・チャップマン宛ての手紙の中で、[六]はっきりと示されている。さらに、『メアリ・バートン』は彼女の夫ウィリアム・ギャスケルによって方言の注釈が付けられた。[七] 注釈というのは方言の問題に対して少し違った感じ方を読者に誘発するので、ここでギャスケル氏の責任を明示しておく必要がある。

しかし、正確を期したいというギャスケル夫人の願いは、あからさまな表明ではなく作品中に結実したものによって、より顕著に示されている。G・メルチャズが明らかにしたように、[八] 彼女は発音のみならず語形についても方言の信頼性を高めるという目的を達した。語形に関しては『メアリ・バートン』における二人称の呼称の扱いに実例が見られる。首尾一貫して方言を話している博識で昆虫や植物に造詣が深い職工、ジョブ・リーが全員に「きさん（*ye*）」もしくは「おまやー（*yo*）」を使うのに対し、メアリの父ジョン・バートンは実の娘と義理の妹エスタに「おめえ（*thou*）」を用いているが、仲間の労働者には「おまやー」を使う。彼の妻のメアリとエスタは皆に対して「あんた」（*you*）を使うけれど、娘のメアリは特にエスタ叔母さんの声の中に「彼女の母親の調子、まさに南国出身者の発音」と同じものを見出している。別の（クエーカー教徒の）方言話者であるアリス・ウィルソンは全員に「おめえ」を用いるが、メアリに対してだけは例外で、おそらくメアリ自身の話し方のせいだろうが、この姪には「あんた」を使っている。メアリの恋人ジェムもまた彼女に話しかける時は「あんた」である。彼の母親ウィルソン夫人はいつも二人に対して「おめえ」を用いている。このような使用パターンは、方言話者がどのくらい「方言まる出しの（broad）」状況にいるかによって、そして話者とその相手との相対的な年齢や親疎の度合いによって決まってくる。確かに、ジェムの母親は彼を叱責する際には「あんた」を使い、「おめえは父ちゃんのごと立派な男じゃなか、ほんなこつ！」というふうに、作者の表現を借りれば「見下したような言葉にもかかわらず、愛情をたっぷり込めて」話す時には「おめえ」に逆戻りしている。

さらに、この例が示しているように、おそらく方言はギャスケル夫人が慣れ親しんだものだったので、そこには押しつけがましさが感じられない。方言は小説の基本構造に織り込まれているのだ。また、スコットの作品におけるスコットランド方言のように理想化されてもいない。ジョン・バートンのために主張されているのは、「よくある類のランカシャー出身の荒くれた男の雄弁さ」（第十五章）だけで、そうした主張の正当性を示す具体例が作中にはある。『メアリ・バートン』において、すべての産業小説の

中核となっている雇い主と雇い人との軋轢が頂点に達するのはストライキの決定的な場面であるが、ジョン・バートンの国会への熱烈な嘆願が方言の色づけによって妨げを受けるようなことはない。そうした色づけは次の引用文で音韻や語形、そして時には「敷石」（*flags*）のような語彙の要素に現れているが、この一節は雇い主が述べる言葉のどれよりも雄弁で理路整然としている。

「切なかどこじゃなか、腸ん煮えくりかえるごたー。真面目な連中ば笑いもんにすー奴らのおるったい。寒うて震えとー婆さんさ、石炭ばちょこっと、じめじめしとー敷石に寝転がって、お産ばせんといかん可哀想な嫁さんさ、布団と温か着もんばちょこっと、腹の萎えて大声で泣かれんぐれえ、細か声がますます弱うなったチビ助どもさ、食いもんば求めて来んしゃった連中ば、笑いもんにすーもんのおるったい。皆の衆、オレら、賃金ばもっと要求しとーばってん、そげなもんの欲しいけん、要求しとるっちゃないと？　オレら、バリ旨かもんが欲しいわけじゃなか、腹いっぱい食いたいだけばい。オレら、金ぴかのコートとかチョッキの欲しかわけじゃなか、温か着もんの欲しいだけたい。それさえ手に入りゃあ。何でできとったっちゃ、せからしかこたー言わんばい。奴らんごたー太か屋敷の欲しいわけじゃなか。雨やら雪やら嵐から身ば守らるー屋根の欲しいだけたい。そげんくさ、オレらだけじゃなかとばい。身ば切るごたー風ん中で、オレらにしがみついとー弱かチビ助どもば、この世でこげん苦しむとに、なしてまた産みんしゃったとって目できいてくー、そげなチビ助どもば守る屋根の欲しいだけたい」（第十六章）

この発話文の構成と配列は、その他の言語的特徴とは違って、正規の標準的な話者のそれに近い。そのバランスのとれた対称性と修辞のパターンは、自分がはっきりと感得している議論を整然とまとめたような、そんな威厳のある知性を暗示している。このジョンソン博士風とも言える文の構造は、[九] ジョン・バートンの「ランカシャー出身の男の雄弁さ」を明らかに示す証拠になっており、彼の威信を高めるような激しい憤りを力強く伝えてやまない。

第三節　『ハード・タイムズ』の方言におけるギャスケルの影響

ディケンズは、『ハード・タイムズ』で方言を話す中心人物のスティーヴン・ブラックプールを通して、ギャスケル夫人がジョン・バートンで計画したことと明らかにパラレルをなすことを意図していた。しかし、ギャスケル夫人にとってランカシャー方言の供給源が自分自身の観察にあったのに対し、ディケンズの場合

はそうでなかった。「彼は一八三八年十一月から一八三九年一月にかけてランカシャー州で数週間を過ごした」とS・ガーソンは主張しているが、[十] これを裏付ける証拠となる手紙はない。手紙が示しているのは、ディケンズが一八三八年十一月一日にシュルーズベリー、十一月五日にリヴァプールに着いたばかりなのに、「マンチェスターでの短期滞在ののち」十一月九日にロンドンへ戻ったことである。[十一] これまで言われてきたように、一八五四年一月の末、彼は短期間のうちにプレストンのストライキを調査した。このような北部地方への束の間の訪問が、研究の経験を積んでいない人間に方言の語彙と語形を真剣に収集する時間を与えたとは、とうてい思えない。

ここで筆者はやっと、これらの方言の出所が、『デイヴィッド・コパフィールド』におけるペゴティー一家の方言の場合と同じように、記録資料であることを示すことができる。ディケンズが死んだ時に彼の書斎にあった書物の目録に含まれていたものとして、『ティム・ボビン――注釈付き概説ランカシャー方言』がある。この有名な本はランカシャー州出身のジョン・コリア（一七〇八～八六）によって一七四六年に初めて出版されたが、ディケンズはその一八一八年度版をどうやら所有していたようだ。[十二] この本そのものはディケンズにとってほとんど理解の及ばぬものだったに違いないが、付録としての「注釈」は非常に貴重だったはずである。

ここで特記に値するのは、この本には『ハード・タイムズ』に出てくる（標準的な英語の語形とは違った）単語のほとんどすべてが含まれている点であり、その全部にディケンズの使用したコンテクストとぴったり合う意味が注釈されている。例えば、「長か、しかともない」（*dree* < 'long, tedious'）、「いたらんこと」（*fewtrils* < 'little things'）、「くらしあい」（*fratch* < 'a Quarrel'）、「けわしい、はじか犬のごたー、しゃあしい」（*hetter* < 'keen, eager as a Bull-Dog'）、「ぼけんごたー」（*hey-go-mad* < 'like mad, shouting mad'）、「のぼせた／ぐらぐらこいた」（*hottering-mad* < 'very mad, or ill vexed'）、「だごバチ」（*hummobee* < 'the large round Bee'）、「おろたえた」（*moydert* < 'puzzl'd, nonp(lus)'d'）などがある。これらはすべて『ハード・タイムズ』のテクストの初版から一貫して見られる単語である。その幾つかは非常に特徴的なものなので、「注釈」が出典であることをはっきりと示している。

『ティム・ボビン』の「注釈」には標準英語の語形を持つ単語も多く見られ、ディケンズが『ハード・タイムズ』の初版で使った、まさにその語形が数多くの例として収められている。事実、この小説で使われたランカシャー方言が本物であることを示す特徴の多くは、『ティム・ボビン』の本文とは（あるいはディケン

ズ自身の調査とは）関係なく、「注釈」の方に見出すことができる。例えば、語の最後に来る「エル（*l*）」の消失、子音の前の「エル（*l*）」の消失、*/sk/* に代わる「長いエス（*ſſ*）」、（*oo* と綴られる）*/aɑ/* に代わる「ウ（*/u/*）」、そして（*ow* と綴られる）「開いたオ（*/ɔ/*）」に代わる */aɑ/* などがある。ディケンズは定冠詞（*th'* ＜ 'the'）や前置詞（*wi'* ＜ 'with'）の語形を「注釈」に見出すことはなかったであろうが、これらは彼がランカシャー州を短期訪問しただけで分かったはずだ。また、彼は「もんでえ」（*matther* ＜ 'matter'）も「注釈」に見つけたであろうが、すでに『ニコラス・ニクルビー』の第十三章でジョン・ブラウディを使って、[十三] 北部地方の話し言葉として類似した語形を使っていた。

さらに、『ハード・タイムズ』のテクストを校正する様々な段階で、方言を処理する際に相当な変更がなされた証拠がある。原稿で使用された語形が、ゲラ刷りの校正時に、『ティム・ボビン』の「注釈」に収められた語形と同じものに幾つか変更されていたのである（例えば、*a'* → *aw*, *came* ⇨ *coom*, *afeerd* → *fearfo'*, *fra* → *fro*, *nought* ⇩ *nowt*, *of* → *o'*, *thought* → *thowt*）。校正されたゲラ刷りには見られないが、ハウスホールド・ワーズ版では見られる類似した幾つかの語形は、「注釈」の中の語形と全く同じである。これらの変更は、例外はさておき、チャールズ・ディケンズ版にも残されており、この後の段階においてさえ、さらなる微細な変更が見られる。注目に値するのは、*aw* を *a'* にする珍しい変更においてのみ、いつも「注釈」の語形とは違う変化をしていることである。また、先に挙げた *comed* に代わる *came* のように標準的な語形へまれに戻ることがある。これらは偶然であるかも知れないし、『デイヴィッド・コパフィールド』に見られるように、いわゆる方言使用のちょっとした「差し控え（toning down）」かも知れない。

ディケンズはまた、時おり言われてきたように、彼自身も一冊もっていたウィリアム・ギャスケルの『ランカシャー方言に関する二つの講義』（一八五四年）を別の出典として使ったようである。[十四] これはギャスケル氏が、主として語源を引くことによって、方言を言語の崩れとする従来の考えを打破しようと努めた限定版の本である。このギャスケル氏の目録とスティーヴン・ブラックプールの言語との間に目を引くような類似点はない。両者に共通しているのは、ディケンズが上に挙げた『ティム・ボビン』の「注釈」の中に見出した、あるいは自分自身の観察によって見出したと思われる幾つかの語形にすぎない。しばしば考えられてきたことに反するのだが、[十五] ギャスケル氏の『講義』はあまり役に立たなかったと思われる。

S・ガーソンが述べているように、ランカシャー方言の発音を示すためにディケンズの使った語形が「正確で、使用も一貫して

いる」というのは、[十六] 確かに注目に値する。しかしながら、この陳述は形態論的に正しいとは言えない。その「一貫性」のためには、例えば二人称の代名詞ならば、ギャスケル夫人に見られる巧妙な特殊技能が必要である。そうしたものをディケンズは駆使することができなかった。自分の愛する女性に対して「おめえ」(*thou*) を使わせようとする試みがスティーヴン・ブラックプールに少し見られるのは確かだが、その他の箇所では「おまやー」(*yo*) と「あんた」(*you*) の間に不安定な揺らぎが見られるし、彼は忌まわしい妻に対して「おめえ」(*thou*) を使っているのに、妻は彼に対して「おまやー」や「われ」(*thee*) で呼びかけているからである。

第四節　『ハード・タイムズ』での「リアリズム」の試み

ここで結論を導くならば、それはディケンズが『ハード・タイムズ』の方言のために――特にスティーヴン・ブラックプールの話し言葉のために――『ティム・ボビン』の「注釈」という記録資料を証拠として使ったに違いないということ、そして自分が信用できると思った参考書に、前の二つの小説で方言を利用した時よりも、さらに注意を払ったはずだということだ。しかし、彼は以前にもまさる迫真性を『ハード・タイムズ』で狙っていたに相違ないと言えば、それはこの小説の方言使用に含まれる様々な意味を少ししか理解していないことになる。ディケンズのはっきりした姿勢は、「恵まれた者たちの同情も受けずに……この声なき人々を時として身もだえさせている苦悩」について、「少しでも表現して」やりたいというギャスケル夫人の願いに近いものがあるように思える。それを表現するために選ばれた媒体が、この小説の図式においては、搾取された「働き手たち (Hands)」を代表するスティーヴン・ブラックプールなのだ。彼は明らかに働き手たちの道徳的優越性を立証すべく意図された人物である。こうして、彼の物語は（ジョンやジョージが候補に挙がって退けられたあとに選ばれた）「スティーヴン」という彼の名前が暗示しているかも知れない「殉教」で完結する。[十七]

このような解釈を実証しているのが彼の死の扱い方である。窃盗の濡れ衣に敢然と立ち向かうべく、彼がコークタウンの町へ戻る際に落ちてしまう炭坑の立穴の呼び名は「古い地獄坑 (Old Hell Shaft)」（第三巻第六章の章題）となっている。彼が落下後に倒れて死を待っている間に見た星について語るとき、明らかにキリスト教を意図した言葉が用いられている。

「何回でん意識の戻ったばってん、穴ん下でくさ、苦しんどー俺ば照らしてくれとんしゃるこたー、分かっとったばい。そんたびに、

ありゃー救世主様の家さ案内ばしてくれんしゃる星やなかねって、考えとったとですよ。ありゃー絶対、あん星に間違いなか！」（第三巻第六章）

語り手は、産業主義の害悪について教えを必要としている読者と向き合うために、聖人伝作者のような役割を担い、スティーヴンを殉教者として提示している。

そして語り手は、読者にコークタウンという町を見せる際に、皮肉な筆致によって安心感を与える。

……「人工」によって「自然」が忘却の彼方にやられるなどと、心配性の皆さん、決してお思いになりませんように。神の作品と人間の作品とを、どこでもいいので、並べてごらんなさい。取るに足りない大勢の「働き手たち」が神の作られたものであるにせよ、人間の作ったものと比較すれば、その威厳は増すばかりでしょう。（第一巻第十一章）

こうした語り手の意見表明はスティーヴン・ブラックプールを通してなされることになるのだが、最初から語り手は主人公の威厳を直に傷つけるような形の言及をしている。つまり、この四十歳にすぎない男については、他の働き手たちに「老スティーヴン」というニックネームを使わせているのだ。

スティーヴンは実際より老けて見えたが、それはこれまで辛い生活を送ってきたからである。どんな人生にもバラの花とトゲがあると言われている。しかしながら、スティーヴンの場合は不運か手違いがあったように思えてならない。それによって、誰か別の男が彼のバラの花をもらい、彼の方は自分自身のトゲに加えて、その別の男のトゲまでいただく羽目になったのである。彼の言葉を借りれば、数々の面倒を背負い込んできたということだ。この事実にぞんざいな敬意を表して、普段みんなは彼のことを「老スティーヴン」と呼んでいた。（第一巻第十章）

バラの花とトゲという決まり文句や、よく知られた「数々の面倒」という語句は、思考が凡庸な男を想起させる。「老スティーヴン」という呼び名を「ぞんざいな敬意」として解釈することも、それ自体、価値を減じさせる行為である。この呼び名は、のちにブラックプールが労働組合への加入を拒否したあとで、語り手が「老スティーヴンはすべての面倒を背負い込んで、その場から立ち去った」（第二巻第四章）と述べた時に、ひどく見下すような効果をはっきり提示することになる。この場面は、老スティーヴンが工場主のバウンダビーと話す際に、負け組としての自分自

身の社会的地位を念頭に置くことで――向かっ腹が立ったけれども、「……自分が今どこにいるのか、きちんと思い出して声を荒げることさえしなかった」（第二巻第五章）ことで――語り手から是認を得る場面とパラレルをなしている。

また、語り手は大胆な筆づかいで戦略のアウトラインを示し、ディケンズ自身が職工専門学校（Mechanics' Institute）で会って激励した労働者たちと老スティーヴンとは違うことを明らかにしている。[十八] この男は、有名な科学者たちに匹敵する実力を主張できるような、「そんな類のマンチェスターの労働者たち」（第五章）の一人として紹介される『メアリ・バートン』のジョブ・リーとは違うのだ。

> ……今の地位にあっても老スティーヴンは非常に知的な人間として通っていたかも知れないが、実際はそうではなかった。長年にわたって途切れ途切れの余暇をつなぎ合わせ、むずかしい諸学問を習得し、到底あり得ない事柄についての知識を獲得していた、そうした非凡な「働き手」とは思われていなかったのだ。演説ができて討論を続けることもできる「働き手」たちの間には彼の居場所がなかった。何千という仲間たちは、いかなる時でも、彼よりずっと立派に話すことができたからである。（第一巻第十章）

しかし、傑出した知性をこのように否定することは、別の種類の賛辞へ道を開くことにもなる。

> 彼は動力織機の有能な織り手で、申し分のない高潔な男であった。彼がこれ以上のどんな人間であるのか、あるいは他にどんなものを内に秘めているのか（そんなものがあるとすればの話だが）、それは彼自身に示めさせることにしよう。（第一巻第十章）

ここで、スティーヴンが「内に秘めている」もの、すなわち彼の道徳心は彼自身の行為によって、知的な価値と対立する形で、示されるだろうと読者は思うかも知れない。しかし実際には、彼の行動が独立独行の精神を暗に示すことすらない。飲んだくれの妻を死なせてしまいたいという誘惑に抗している時でさえ、彼は仕事仲間のレイチェルという女性に頼っているのである。超然とした気高い行為として意図された労働組合への加入の拒絶についても、それを彼に義務づけているのは彼女との約束なのだ。いとも簡単に彼は功利主義者の息子であるトム・グラッドグラインドの罠にかかり、銀行の周囲をぶらついていたという理由で、窃盗の容疑を受ける。彼の最後の肯定的な行動は逃亡であり、これによって彼の犯罪の容疑が固まる。これはすべて、彼の内に蓄えられた力を匂わせることもなく、彼に実務的な知性が欠けているこ

とを強調するのに役立つだけである。

こうした内に秘めた力の欠如は、仕事仲間たちによる村八分へのスティーヴンの反応においても力説されている。

長年ずっと彼は無口で物静かな男だったし、他の労働者たちとはほとんど付き合わず、沈思黙考の生活に慣れてしまっていた。頷かれたり、視線を投げかけられたり、言葉をかけられたりして、時には自分の存在を認めてもらいたいといった、そんな激しい感情を心の中で抱いたことは今まで一度もなかった。そうした些細なことを通して心の中に一滴ずつ注ぎ込まれる安堵の気持ちが、どれだけ大きなものになるか、彼には分かっていなかった。仲間たち全員から見捨てられたことに対して、自分の良心の中で恥辱感や屈辱感を抱かないようにするのは、ほとんど不可能だと思えるほど困難なことだった。（第二巻第四章）

この男について構築された理想像にとっては致命的なことであるが、この引用文はある種の道徳的な混乱を暗示している。

実際、『ハード・タイムズ』におけるスティーヴンの力強さは自分の言葉による対決に――主として中産階級と雇い主を代表するバウンダビーとの対決に――左右されるようになる。労働組合への加入を拒んだ結果として仲間の労働者たちから爪弾きされたのち、スティーヴンは離婚するためのアドヴァイスを求めにバウンダビーの所へ行き、自分の立場について彼と話し合うことになるが、結局は相手に言い負かされてしまう。その原因は、これが売り言葉に買い言葉という討論の場であるにもかかわらず、彼が不満を漏らしていることにある。さらに大きな原因は、語り手が自分には聞こえると主張する雄弁さ――ギャスケル夫人のジョン・バートンには確かに備わっていた「無骨な（rugged）」（第二巻第五章）雄弁さ――をスティーヴンの言語が獲得していない点にある。

これがもっとも人目を引く形で現れているのは、本稿の第二節の最後に引用したバートンの話し言葉とコントラストをなす次の一節である。「雇い人と雇い主」と題された第二巻第五章で、スティーヴンは産業小説の核心問題として雇い人と雇い主の相対的な報酬について話しているが、バウンダビーは雇い主を代弁して「おまえたちは、大体、何が不満なんじゃ？」と尋ねる。その答えはおそらく極めて明確に、すなわち雇い人のスティーヴンと彼の仲間たちのための弁明（アポロギア）になるように意図されている。

「旦那、オレは、そればうまか具合に言い表されんかったとですよ。オレもそれなりに同（おんな）し気持ちはあったちゃがね。ほんなこつ、旦那、オレら滅茶苦茶ばい。町ん中ば――けっこう潤いよっちゃが

――見ちゃってんない。こげなとこ連れて来られ、織らされ、梳かされ、ともかく揺籃から墓場まで、いっちょん変らん暮らしば、なんとか立てとー連中の多かとば、見ちゃってんない。オレら、どげな暮らしばしとーか、どげな場所に、どげな人数で、どげな見込みのあって、どげな変化のあって生活しとーか、見ちゃってんない。どげなふうに工場のいっつも動きよーか、工場で働いても働いても、遠くにある目的にゃ、いっちょん近づけんってことば――近づてくるたー、いっつもかっつも「死」だけたい――見ちゃってんない。旦那、オレらのこと、どげなふうに考えとーか、どげなふうに書いとーか、どげなふうに話しとーか、どげなふうに代理人と一緒に国務大臣のとこへ行っとーか、見ちゃってんない。旦那がいっつも正しかこと、オレらがいっつも間違っとって、それで生まれてこんかた、道理のあったことなんぞあるめーってことば、見ちゃってんない。旦那、こげなもんの一年一年、一代一代、ますます増えて、だんだん太かもんに、どんどん広かもんに、ますます辛かもんになっとーとば、見ちゃってんない。旦那、こげなもんば見て、滅茶苦茶じゃなかなんて、堂々と言える人のおんしゃるとな？」（第二巻第五章）

この男にいつも見られる構文法の誤りが全部ここに現れている。彼は論理的な連結を十分に展開できない。その証拠は「旦那、オレらのこと、どげなふうに考えとーか」で始まる文にあり、「旦那がいっつも正しかこと」と前述の部分とがどんな点で関連しているのか、ここでは明らかになっていない。同様に、それに続く「それで生まれてこんかた、道理のあったことなんぞあるめー」という部分もはっきりしない。これは「あなたは私たちに理性の働きがないことを責めている」という意味なのか、それとも「私たちが間違っているとあなたに思わせるような原因は私たちの方にはなかった」という意味なのだろうか。この「それで」が要領を得ない一方で、間接的な抗議の表現として反復される命令文、「見ちゃってんない」はスティーヴンの議論の不明瞭性を増す以外に何の役にも立っていない。「ともかく（somehows）」とか。「一年一年（fro year to year）」とか、「一代一代（fro generation unto generation）」とかいった不必要な語句もある。これに加えて、上で述べたように何を指示しているのか（例えば、前方に照応するものがない遡及指示詞）が曖昧である。かなり曖昧な冒頭の代名詞「それば（t）」は、おそらく「何が不満なのか」を指示しているのだろうが、そこから始まる一節は「だんだん太かもんに、どんどん広かもんに、ますます辛かもんになっとー」という、より曖昧な「こげなもん（this）」の説明で最高潮に達している。似たようなジョン・バートンの不平不満は驚くほど明確な意味内容になっているが、それが『ハード・タイムズ』ではスティー

ヴンの不明瞭さの中で消失してしまっているのである。

『ハード・タイムズ』における方言の発音はまあまあ正確であり、その構成には口語体が使われている。結果的に語り手が聞くことになるのは、偏狭な、創意に欠けた、かなり頭が混乱した人物の話である。スティーヴンの標語となっている（いろいろな変種がある）「滅茶苦茶ばい（'Tis a muddle）」は、ただ単に社会の混乱のみならず、「申し分のない高潔な男」とは相容れないような内部の混乱をも反映しているように思える。このような矛盾は語り手の中にもある。つまり、語り手は高潔さが見えると主張しながらも、非標準の話し言葉は社会的劣等者の慣用である――非標準の話し言葉を使用する人間は道徳的にも知的にも貧弱な人間である――という考えに組するような信念を見せているのだ。そういうこともありそうだというのが偏見と結び付いているのは皮肉である。このように語り手自身の意識が混乱してしまっているのは、たぶん、スティーヴンの乏しい知性に貧困と社会の不平等を押しつけた結果であろう。

【訳注】

一　ディケンズが劣悪な環境の寄宿学校（Dotheboys Hall）と校長（Squeers）を弾劾した『ニコラス・ニクルビー』では、その学校のあるヨークシャー州の方言が使われ、デイヴィッド・コパフィールドに深い愛情を抱き続ける忠実で頼もしい乳母ペゴティーの実家がある漁村（Yarmouth）では、ノーフォーク州の方言が用いられている。ディケンズはペゴティーの兄が話す方言にエドワード・ムア（Edward Moor, 1771-1848）の『サフォーク州の言葉と語法』（*Suffolk Words and Phrases* [London: R. Hunter, 1823]）を利用したと言われている。

二　フランシス・トロロプ（Frances Trollope, 1780-1863）はアンソニー・トロロプの母で、月間連載で小説を出版したイギリス最初の女性。夫の生活力のなさゆえに息子三人とアメリカに渡り、帰国後そこでの経験をもとに辛辣な見聞記を数多く書き、奴隷制度を非難する小説なども書いたが、それらが長年イギリス人たちのアメリカ観の拠り所となった。個人の慈善や博愛では産業問題を解決できないことを示唆した『マイケル・アームストロング』（*The Life and Adventures of Michael Armstrong: The Factory Boy*, 1840）はイギリスで出版された最初の産業小説の一つ。「怪物のような紡績工場での骨の折れる仕事で何千もの幼い労働者たちがさらされている、見るも恐ろしい不当な仕打ちと苦しみ」（第三章）に読者の目を開かせようとしたプロパガンダ小説として、工場改革の主導者（特にチャーチスト）たちの間でよく読まれ、一八四七年に十時間労働法が成立するのに寄与した。

三　シャーロット・エリザベス・トナ（Charlotte Elizabeth Tonna, 1790-1846）は、ノーフォーク州の主任牧師の娘として生まれ、連隊長との結婚後は福音主義のプロテスタント作家として様々な宗教団体のために小冊子を書いた。カトリック教会と敵対したので、彼女の出版物の何冊かは禁書目録（Index Expurgatorius）にリストアップされた。彼女は労働改革の唱道者でもあり、「工場物語」という副題を持つ代表作の

『ヘレン・フリートウッド』（*Helen Fleetwood*, 1841）では、イギリスの工場における悲惨な労働環境（特に女性に対する搾取）を調査して描いた。また、フランシス・トロロプの『マイケル・アームストロング』と同じように、工場の労働環境を非難して十時間労働の運動を支持した。

四　エリザベス・ストーン（Elizabeth Stone）は、十九世紀初期のマンチェスターにあったトーリー党の新聞『マンチェスター・クロニクル』の社主ジョン・ホイーラー（John Wheeler）の娘。代表作の『ウィリアム・ラングショー』（*William Langshawe, the Cotton Lord*, 1842）は、マンチェスターの繊維業を欠点はあるものの利益をもたらす組織として捉えている。若い女性が社会に搾取されるというテーマはむしろ前述の『ヘレン・フリートウッド』の流れを汲むもので、そのテーマは彼女の後続作品『若き婦人帽子屋』（*The Young Milliner*, 1843）にも見られる。

五　ディケンズがギャルケルへ宛てた一八五四年四月二十一日付けの手紙。Graham Storey, Kathleen Tillotson and Angus Easson, eds., *The Letters of Charles Dickens* (Oxford: Oxford UP, 1993) 7: 320. ギャスケルは、四月二十三日付けのジョン・フォースター宛ての手紙で、「ああ！　ディケンズ氏に手紙を書いたのですが、ストライキの問題を扱うつもりはないとおっしゃっています――総じて、この返事で私は気持ちが楽になりました」(J. A. V. Chapple and Alan Shelston, eds., *The Letters of Mrs Gaskell* [1966; Manchester: Manchester UP-Mandolin, 1997] 281) と言っている。『ハード・タイムズ』で工場労働者のブラックプールが登場するのは第一巻第十章「スティーヴン・ブラックプール」（分冊出版は四月二十九日）だが、第二巻第四章「同志諸君」（分冊出版は六月十日）では「ストライキの問題」が扱われている。

六　例えば getten となるべき箇所が gotten になっている誤植。*The Letters of Mrs Gaskell*, 64. エドワード・チャップマンはロンドンの出版社チャンプマン・アンド・ホールの共同経営者で、主としてディケンズとサッカレーの小説を出版していた。ギャスケルも処女作の『メアリ・バートン』から『北と南』までをチャンプマン・アンド・ホール社から出版した。

七　一八四八年四月十七日付けのエドワード・チャップマン宛ての手紙（*The Letters of Mrs Gaskell*, 56）を参照。この手紙でギャスケルは、他の州に住んでいる人が理解できそうにないランカシャー方言の使用の難しさについて言及している。

八　Gunnel Melchers, "Mrs Gaskell and Dialect," *Studies in English Philology, Linguistics and Literature: Presented to Alarik Rynell*, ed. Mats Ryden and Lennart A. Bjork (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1978): 112-24.

九　ジョンソン博士（Samuel Johnson, 1709-84）は十八世紀イギリス文壇の大御所的存在で、その卓抜な知性と感受性、誠実を尊んで虚偽を憎む態度ゆえに、今日に至るまでイギリス国民の理想的人物として慕われている。キリスト教的道徳家の立場と古典主義的文学観から批評作品を書いたジョンソン博士の文体は、ラテン系の語を多用し、荘重で筆力が雄勁であると同時に、大げさな言い回しや重苦しいところに特徴がある。

十　Stanley Gerson, *Sound and Symbol in the Dialogue of the Works of Charles Dickens* (Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1967) 367.

十一　これはH・K・ブラウンと一緒に行ったイングランド中部地方と北ウェールズのツアーで、リヴァプールではジョン・フォースターが

加わり、最後は三人でマンチェスターを短期訪問している。*The Letters of Charles Dickens*, 1: 447.

十二　See J. H. Stonehouse, ed., *Reprints of the Catalogues of the Libraries of Charles Dickens and W. M. Thackeray* (London: Piccadilly Fountain, 1935) 111. 自称「ランカシャーのホガース」のジョン・コリア（John Collier, 1708-86）は「ティム・ボビン（Tim Bobbin）」という筆名で知られた諷刺家・詩人。処女作の『概説ランカシャー方言』(*A View of the Lancashire Dialect, or, Tummus and Mary*, 1746) に続いて書いたランカシャー方言の詩集『人間の欲についての素描』(*Human Passion Delineated*, 1773) はイラスト付きで、上流階級と下層階級の両方が容赦なく諷刺されている。

十三　ジョン・ブラウディ（John Browdie）はヨークシャー州に住む食欲旺盛な、短気だが善良な巨漢の穀物商人。

十四　ディケンズは一八五四年六月十七日にギャスケルに宛てた手紙の追伸として、『メアリ・バートン』の第五版と一緒に出版されたギャスケル氏の『二つの講義』(*Two Lectures on the Lancashire Dialect*, 1854) を非常に楽しんで読んだと記している。*The Letters of Charles Dickens*, 7: 357.

十五　例えば、ノーマン・ペイジはディケンズが『二つの講義』を利用した可能性に言及している。Norman Page, *Speech in the English Novel* (1973; London: Macmillan, 1988) 69.

十六　Gerson 338.

十七　George Ford and Sylvère Monod, eds., *Hard Times* by Charles Dickens (New York: Norton, 1966) 234. 聖徒ステパノ（Saint Stephen）は原始キリスト教会最初の殉教者。イエスの復活後、使徒を補佐するためにエルサレムの教会で選出された七人の一人。彼はエルサレムのユダヤ法院で説教を行い、キリストを処刑した人々の頑迷さを咎めたために石で打ち殺された（『使徒行伝』六～七章を参照）。記念日は十二月二十六日。聖ステパノが石で打たれて殉教した後の弟子たちによる遺骸の埋葬の様子を描いた絵としては、ウジェーヌ・ドラクロワの『聖ステパノの遺骸を抱え起こす弟子たち』（一八六〇年）が有名。

十八　一八五八年十二月三日にディケンズは、マンチェスターの自由貿易会館（Free Trade Hall）で開かれた「ランカシャー・チェシャー教育機関協会（Institutional Association of Lancashire and Cheshire）」の年次総会において、職工専門学校で賞や資格を得た職工たちを称賛するスピーチを行った。K. J. Fielding, ed., *The Speeches of Charles Dickens: A Complete Edition* (Hemel Hempstead: Harvester-Wheatsheaf, 1988) 278-85. 職工専門学校は労働者たちに教育、特に技術系の教育を授けるための機関で、質の高い従業員を確保するために主として産業資本家によって設立された。一八二三年にはロンドンにバークベック・カレッジの前身となる職工専門学校が、翌年にはマンチェスターにユーミスト（UMIST, University of Manchester Institute of Science and Technology）の前身となる（一八三六年にウィリアム・ギャスケルが夜間クラスを担当するようになる）職工専門学校ができた。

【著者紹介】 パトリシア・インガム（Patricia Ingham）はオックスフォード大学セント・アンズ・カレッジの前・上級専任教員（Fellow）で、現在は上級研究教員（Senior Research Fellow）。ギャスケル、ディケンズ、ハーディ、ギッシング作品のペーパーバック版の編者として著名な学者で、オックスフォード大学出版局の「作者と文脈」（Authors

in Context）シリーズではブロンテ姉妹とハーディを担当した。主な研究書としては、*Dickens, Women and Language* (U of Toronto P, 1992), *The Language of Gender and Class: Transformation in the Victorian Novel* (Routledge, 1996), *Invisible Writing and the Victorian Novel: Readings in Language and Ideology* (Manchester UP, 2000) などがある。